

# 東九州支部報

第 56 号

社団法人 日本山岳会 東九州支部 2012年1月25日発行



日本山岳会箱根駒ヶ岳・神山山行(2011年12月4日)

| 1.  | 会務報告                 |    |    |
|-----|----------------------|----|----|
| (1) | 平成23年度第2回支部長会議報告… 加藤 | 英彦 | 2  |
| (2) | 平成23年度年次晚餐会報告 加藤     | 英彦 | 2  |
| (3) | 第27回宮崎ウェストン祭参加報告加藤   | 英彦 | 4  |
| 2.  | 支部活動報告               |    |    |
| (1) | 9月月例山行佐藤             | 壮吾 | 5  |
| (2) | 10月月例山行 星子           | 貞夫 | 6  |
| (3) | 11月月例山行 阿南           | 寿範 | 6  |
|     | 佐藤                   | 秀二 | 10 |
| (4) | 12月月例山行 牧野           | 信江 | 14 |
| (5) | 2011年忘年登山1日目 宮本貞     | 理子 | 14 |
| (6) | 忘年会 久保               | 洋一 | 15 |

| (7) | 忘年登山2日目         | 塩月 | 靖浩 | 16 |
|-----|-----------------|----|----|----|
| 3.  | トピック            |    |    |    |
| (1) | 34年のあゆみ         | 西  | 孝子 | 16 |
| (2) | ペンリレー           |    |    |    |
|     | 由布登山口の「サクラソウ」と私 | 荒金 | 通子 | 17 |
| (3) | 歩く・登る・攀じる       | 安東 | 桂三 | 18 |
| 4.  | インフォメーション       |    |    |    |
| (1) | 報告事項‧新入会員‧会友紹介  |    |    | 19 |
| (2) | 月例山行予定          |    |    | 20 |
|     |                 |    |    |    |
|     |                 |    |    |    |
|     |                 |    |    |    |

# 1. 会務報告

## 平成 23 年度第 2 回支部長会議報告

加藤 英彦

平成23年12月3日(土)午前10時より 本部集会室 出席者 本部役員 10名 全国各支部長 31名

## 尾上会長挨拶

会の現状報告。法人改革の対応概略説明。24年4月 1日に新しく公益社団法人として生まれ変わる。この 選択は正しかったと確信している。支部の活動は基本 的には今まで通りでよい。活性化して会員増強してい ただきたい。会の力は会員の数だと強調。続いて議題 に入る。

① 会務報告

新法人移行プロジェクト 吉永リーダー

支部については今後支部が会の中に入る。本部 のガバナンス (統制) のもとにある。3つの要件 についての許に統制をとる。

- 1) 金(会費) の統制、[事業補助金] と〔運営 交付金〕
- 2) 事業の一体制
- 3) 人事の一体制

本会と一体として活動を行う組織だ。新しい支 部規約を作成するように。モデル規約を後日配布 する。

- ○会計の内訳説明 小林幹事 金の流れの一体制
  - ・運営交付金…使途自由 一人当たり1000円
- ・事業補助金…申請に基づいて配布 一人当た り1500円上限である。

補助金については使途を報告する(領収書に て) 今期の決算は仮払い金として処理されてお り、期末 (3月末) にて清算する。残金確認で きるよう。

- ◎山の日制定プロジェクト 西村委員
- ◎震災復興義援金 宮崎委員

② 支部活動報告 各支部長より事前に配布された 資料集に基づいて割り当て時間各2~3分で報告 があった。

私は資料に基づいて上半期の事業について説明 をした。それとは別に「特に本部にて行われてい る今日の支部長会議の内容について、いかに詳し く全支部会員に伝えるかを努力していきたい。」 と強調した意見を述べた。それが選出された支部 長の責務であると感じたからである。支部長会議 終了。12:10。

## 平成 23 年度 年次晚餐会報告

加藤 英彦

平成23年度12月3日(土) 15時より 品川プリンスホテルアネックスタワー5 F



受付にてネームプレートと式次第のしおりを受取る。 すぐの「展示会」では山の写真同好会の20周年目の作 品41点が展示されている。

会場入口には、特別出展した皇太子殿下の作品「ケ ニア山の黎明 | と題した全倍サイズの写真が飾られて いる。

別室では2時から3つの海外登山報告会が行われて いた。私は最後のチベットナムナニ峰(7694m)の報 告をしていた女性隊員谷口けいさんの話を聴いた。ナ ムナニ南峰から初登頂し縦走した苦労話が印象に残っ た。グッズ販売コーナーでは、様々な山岳会のマーク 入のグッズが売られていた。アタックザックや帽子が 好評のようだった。

晩餐会は出席者425人。テーブル数49テーブル。私 は初めて支部長として参加したが事前に「剣山」の その他、四国支部の新設予定等の会務報告あり。 テーブルのテーブルマスターを仰せつかった。定刻20 分前には全員が席につき18時きっかり正面の扉が開き 皇太子殿下が入場され、中央の「富士山」のテーブル に着かれた。事前に配られたレジメには「お願いと注 意事項」が念入りに記されてある。

開会の辞

- · 会長挨拶
- ・物故者への黙祷
- ·新名誉会員発表
- ·新永年会員発表
- · 会長特別表彰発表
- ・新入会員紹介・代表挨拶 と式次第にのっとって進められた。

当日、東九州支部より会員番号(14952)の塩月靖浩さんが参加。他の新入会員35名と共に壇上に立つ。後にも先にも、この一回しかないチャンスである壇上に上がられる光栄に浴した。本人も大満足であったようだ。新入会員の代表挨拶は何と13歳の女性(中学生),しかも震災の宮城支部からということで会員の中でも最年少の紹介に大きな拍手が起こった。

そして、恒例の鏡開きは皇太子殿下を中心として六人の方々が壇上へ。斉藤名誉会長の音頭と乾杯後会食が始まった。メニューはホテル自慢のフランス料理フルコースだ。同じ時、同じ空間で400名以上の仲間達と食事をし、飲むことができる楽しい一時である。

ここから、各テーブル毎の歓談の時間となる。まず、 テーブルマスターの私が自己紹介を兼ねて挨拶、そし て列席の各自が一人ずつのスピーチの時間である。東 九州支部から参加の飯田、星子、塩月そして佐藤 (壮)の4名、福島支部からの2名と北九州支部の会 友日向さん合計8名のテーブルであった。そして、北 海道支部から順次支部の紹介である。名前が呼ばれる たびにその支部のメンバーは、その場から立って挨拶 をする。そして、紹介の中でその支部の特筆すべき事 のアナウンスが一言流れる。我が東九州支部の紹介は 「毎年韓国山岳会との交流登山を続けています。」とい う紹介であった。一通り支部紹介が終って、8時丁度、 楽しそうに歓談されていた皇太子殿下がお帰りになっ た。その後は各自席を立って会員相互の懇親の時間と なった。400名以上の会員が交流のため、あちこちで の話しがはずんでいく。私も久しぶりの方々へ挨拶を

して回る時間となった。特にかって東九州支部に在籍されていた松田さんとは久しぶりの再会であった。お元気そうな気配で昔を懐かしんだ。日本山岳会の歴史と伝統を肌に感じる時間であり、大変楽しく有意義な晩餐会であった。皆さんも一度でよいからこの晩餐会に参加することをお勧めする。今回、特に支部の星子さんは30数年の会員歴があるにもかかわらず初参加であった。本人からも大変参加してよかったというコメントがあった。楽しかった会も21時には閉会となった。

# 晚餐会記念懇親会山行 23年12月4日(日)

箱根・神山(1327m)~駒ヶ岳(1438m)

朝7時、JR品川駅南口を2台のバスで90名で出発。 箱根園よりロープウェイにて駒ケ岳へ登り山頂神社に て記念撮影。前日までは天候不順であったが、この日 は打って変わっての好天だ。芦ノ湖はすぐ目の下に、 前夜の冷え込みで冠雪した真っ白な富士山がすぐ真正 面に見え、伊豆の島々、房総半島、はたまた人によっ ては東京の市街の中にスカイツリーが見えたとか? 360度の大パノラマを満喫しながら神山へと、一旦灌 木帯を谷へ下り、そして三角点の神山(1437m)へ登 る。冠ヶ岳との鞍部にて三々五々昼食タイムだ。そし て観光客で賑わっている大涌谷へと下る。下る途中か らも手の届きそうな富士山をこれでもかというほど眺 めて大涌谷の人の波に合流。バスは2時出発。途中、 小田原駅にて下車グループを見送り、夕暮れの早い大 都会へ吸い込まれる如く出発点の品川へ着いた時は暗 くなっていた。品川から羽田へそして最終便にて空路 で帰途についた。

(大分着21時15分)



## 第27回 宮崎ウェストン祭参加報告

加藤 英彦

宮崎支部は昭和60年に東九州支部から独立して創った支部である。その宮崎支部が毎年行っているウェストン祭に今年は東九州支部より3名参加した。

英国人宣教師ウォルター・ウェストンは明治21年に 来日、延べ13年間の滞日中、布教活動の傍ら日本国内 を登山や旅行して回った。

明治23年11月6日には宮崎県五ヶ所より祖母山に登った記録が残っている。その当時は、九州で一番高い山は祖母山であると思われていたのだろう。

"「日本近代登山の父」として知られる英国人宣教師ウォルターウェストン師を偲び、山岳遭難者に哀悼の意を表し登山の安全を祈る。"とその案内にある。

平成23年11月5日16:00より式典はウェストンレリーフのある三秀台にて行われた。参加者は九州四支部より15名、地元宮崎支部より39名、そして地元関係者や小学生計70名。三秀台に建つ鐘の点鐘、黙祷、ウェストンレリーフへの献花、地元高千穂町長挨拶。宮崎支部長挨拶、そして「ウェストン師に捧ぐ鎮魂と新たなる誓いを作詞した前宮崎支部長の大谷夫人が朗読し、児童作文朗読、そして「ウェストン祭の歌」を合唱、参加者全員万歳三唱して終了した。

私もかって第12回のウェストン祭(96年11月3日)に参加した事があるがその時は「ウェストン祭の歌」はまだ歌われてなかった。宮崎支部のこの祭りに対しての気持ちの入れようの表れだろう。歌まで作っている。

その後、場所を近くの五ヶ所野菜集出荷場に移して、 交流会が田原地区村おこし推進協議会の主催で行われた。17時30分受付、神事、主催者の挨拶、高千穂町長 挨拶と続き、神楽(河内神楽保存会)が行われた。飲 み物はビール、かっぽ酒が振舞われ、つまみ類はバ ザーとして販売している。色んな美味しいものを楽し んだ。特にかっぽ酒の振る舞いは竹で作った容器で 次々と焼酎のサービスを受け、十分満足するほどいた だいた。その交流会も途中で山岳会員は宿舎の方に引 き上げて、そこで宮崎支部の進行で九州5支部の紹介 を兼ねて交流会をもち、夜の更けるのも忘れて接待を 受けた。お開きは11時だった。翌日は祖母登山の予定 だったが早朝からの雨で取り止め。地獄温泉につかり 荻岳経由で帰途に着いた。

他ならぬ隣県の支部の行事だ。来年からもっと多く の会員の参加を期待する。

参加者:加藤英彦、星子貞夫、下川幸一



# 2. 支部活動報告

## 9月月例山行

竹島・八島・大入島 (2011年9月24日)

佐藤 壮吾

9月24日土曜日の朝7時佐伯市のインターを降りた 先にあるセブンイレブンに集合。今回は、新入会員2 人も参加して総勢12名で出発。鶴見半島に入ったとこ ろにある松浦港より船出、15分程で白い灯台がある無 人島の竹島に到着。灯台のある山頂まで斜面は急だが、 道が整備されており10分もかからず山頂に到着した。 しかし、草が茂る山頂では三角点が見あたらず、10分 ほど捜索の後ようやく灯台の裏手で藪こぎ隊長の飯田 氏が見つけだした。二等三角点だった。まわりのヤブ を切り開いて記念写真を撮る。

船に戻り次の八島(はしま)に出発、10分程で船着き場に到着。神社はあるがここも無人島である。上陸すると、船が島を離れて港に戻って行った。神社の脇から尾根に登り、そこから山頂を目指した。ここで、西さんが神社へ引き返す。20分程で山頂付近に到着したが、三角点が見あたらない。深いウラジロを掻き分けて皆で探す。10分ほど探したが見あたらない。皆諦めかけていたころ、鎌で土の中を探っていた飯田さんが土の中に、「カチッ」と石の感触。「ここか?」と草をかき分け、土を掘り起こし埋もれていた三角点の頭を発見。5cm以上土の中に埋もれたまま、40年程の時を経て掘り起こされた三等三角点が地表に現れた。

ここで、西さんの代わりに、岐部さんが恒例の文句



竹島にて

を述べ(「もう二度と来ませんよ」など)、その後、今日はじめて参加の若者二人を交えて自己紹介を行う。 山頂から船頭さんに島に戻ってくるように連絡し、下山した。島から松浦港に帰港し、自動車で15分かけて大入島行きフェリー乗り場へ向かった。ここで、3台あった自動車のうち中野さんの車のみ島内移動用に乗船させた。

10分程で大入島に到着。東側から歩いて遠見山登山口へ出発。ところが、登山口が見つからず、それらしい所から登ろうとすると、地元の年配の男性から、「そこの登山道は今は整備されていないので、とても登れない。」と、注意を受けたが、そのまま登り始めた。民家の間を抜けて、ミカン畑?を通り、ミカン搬送用レールに沿いながら登山した。確かに地元の方が言うとおり、草が生い茂り、道が整備されていないため、藪こぎ隊長の飯田氏によって、道が開かれていった。

山頂は草が生い茂り、やはり三角点は茂みの中に隠れていた。12時の時報を告げる音楽が遠くより聞こえてきて、ようやく昼食休憩に入った。昼食後中野さんだけ往路を引き返し、ほかは登りと反対方向である島の西側に降り始めた。途中、道が草に覆われていたが、登りほど多くはなく、わりと楽に、中学校の脇へ下山。

今日、最後の山、高松の登山口へ向う。中野さんの車でピストン輸送。5分程移動し、トンネルをくぐった先にある高松集落付近で下車。次の山こそ、道無き道を行かねばならず、先発隊が登山道となるべき道を探った。何とかミカン畑の間から登れそうな小道を発見し登り始めた。途中、急斜面であったが、尾根の林に入ると割と楽に進めた。山頂へは思ったよりも時間



八島にて

がかかって到着したが、三角点は無事発見できた。帰として見える。 りは、急斜面を慎重に下山し、登山口から港まで無事 到着。16時30位に解散となった。夕方もし時間があれ ば行く予定にしていた長島三角点は結局行かなかった。 この日は天候に恵まれ良き山行となった。

参加者: 飯田、池辺、今山、岐部、児玉、

佐藤 (秀)、佐藤 (壮)、遠江、中野、長野、 西、三浦(良)

## 10月月例山行

七ツ岳・鬼岳・箕岳 (2011年10月8~10日) 星子 貞夫

天候:晴れ

メンバー:加藤英彦、渡辺千代春、池辺明美、 星子貞夫

山域 五島 七ツ岳 (432m)、鬼岳 (315m)、 箕岳 (144m)

#### ♣ 10月8日——

23時30分に野母商船のフェリーで博多港より五島の 福江港に向かう。船内は満席であるが既に所々に輪が 出来て酒盛りが始まっている。我々も早速黒霧の栓を 開ける。

五島列島は通称五島と呼ばれるが、大きな島が五つ あり、北から中通島、若松島、奈留島、久賀島、福江 島である。最大の福江島に五島市があり空港もある。

島は火山帯で土地はやせていて、畑の里芋は茎が短 く、狭い土地に家庭菜園の様な畑が点在している。椿 が多く見られた。

#### **♣**9日—

七ツ岳(432m)は九州百名山に選定された山であ る。ちなみに稜線続きの父ケ岳(461m)は五島列島 最高峰である。

福江港より登山口経由荒川行きのバスに乗る。登山 口はちょっとした公園になっていて、トイレ設備もあ り、水道の蛇口を設備した湧水があり、水汲みの人が 数人いた。

10時に出発し歩行1時間で山頂に着いたが、道は急 登で岩場もあり、下りに使うには難儀する。山頂より 北西に七つのピークが並んでいる。第三峰が一番堂々

丁寧に七つのピークを辿り、13時30分に七嶽神社に 下山し、荒川港に続く舗装道路を1時間半歩き宿とな る「竹の家旅館」に着く。荒川港はかって東シナ海漁 業の基地として栄えたが今は寂れている。

#### **-** 10 ⊟----

五島市からタクシーを呼び鬼岳(315m)に向かう。 鬼岳は草原の丘で噴火口のお鉢めぐりで片道20分の散 歩道で最高点につく。

スタート点に戻り箕岳 (144m) 目指して舗装道路 を歩いたが道が分からなくなり、農作業の人に教わり 山頂に辿りつく。タクシーを利用すべきであった。帰 路は五島市より高速艇で長崎市に渡る。

五島列島は箱庭の様な島である。海岸から眺めると 堂々とした山々が累々と連なっているが、いざ歩いて みると矢張り小じんまりとしている。又教会の多い島 である。

## 11月月例山行

屋久島合宿報告(2011年11月17日~20日) (前半) 阿南 寿範・(後半) 佐藤 秀二



参加者 A班 加藤英彦, 塩月靖治, 阿南寿範, 長野珪子

B班 飯田勝之, 佐藤秀二, 遠江洋子 行程と食糧については次のように計画。 <行程>

- · 第1日目 平成23年11月17日 大分発(23:00) 夜行バス (車中泊)
- · 第2日目 平成23年11月18日
- →鹿児島港着 (6:30):発 (8:30) 折田汽船→屋 久島宮之浦港着(12:30)発→バス→安房→タクシー

## →淀川入口→淀川小屋 (泊)

## · 第 3 日目 平成23年11月19日

淀川小屋発 (6:00) →着 (7:50) 花之江河発 (8:00) →着 (8:50) 投石平発 (9:30) →着 (10:20) 宮之浦岳 (昼食) 発 (10:50) →通過 (11:10) 鹿野三又路→着 (12:00) 永田岳発 (12:20) →通過 (13:10) 鹿野三又路→着 (14:30) 第二展望台発 (14:50) →着 (16:00) 新高塚小屋 (泊)

### · 第 4 日 目 平成23年11月20日

新高塚小屋発 (6:00) →通過 (7:15) 高塚小屋→ 着 (7:30) 縄文杉発 (7:50) →通過 (8:10) 大王 杉通過 (9:00) ウィルソン株→着 (9:30) 大株歩道 入口発 (9:50) →着 (10:50) 楠川分かれ (昼食) 発 (11:10) →着 (12:10) 辻峠発 (12:20) →着 (13:20) 白谷雲水峡発 (14:10) →着 (14:45) 宮 之浦港 発 (15:45) →着 (18:40) 鹿児島港発→大 分着

## <食糧>

- ・基本的に各班で計画し、各人に分配して運ぶ。
- ・コッヘル、コンロ、ガスは各班に1セット準備する。
- ・献立は各班にて考える。できるだけ軽量化。短 時間でできるもの。

#### <第1日目>

· 平成23年11月17日 (木) 曇

人通りの少なくなったトキハ前のバスターミナルに参加者6名は集合した。23時出発である。最近は日帰り登山の多かった私、肩にずっしりとかかるザックは、学生の頃を思い出す。これから、鹿児港まで夜行バスを利用し屋久島を目指す。屋久島登山は、私にとって今回で2度目である。前回は雨にたたられることなく、すべてが目的どおりうまくいった。そのせいか、今回は心配事なく、幾分ウキウキ状態である。バスは、定刻どおり出発する。運転手さんの話によると私たち6名が乗車したため満員状態となる。途中、戸次のバス停を過ぎたあたりからバスは消灯となる。週末の天気予報では、90%雨の予報である。なんとか雨に邪魔されないよう祈りながら寝付く。

#### <第2日目>

· 平成23年11月18日(金) 曇/雨

まだ薄暗い鹿児島中央駅あたりで目覚めである。今

日は、乗り物を降りて淀川小屋まで歩く。とにかく天 気が気になる。バス窓のカーテンをそーっと開けてみ る。曇空だけど雨は落ちてない。20分もしないうちに 終点の鹿児島港に着いた。バスのボックスに入れて あった登山道具を出してもらい肩に背負う。乗船まで、 2時間ばかりあるため待合室を探す。バス停は、高速 船乗り場に横付けのようで、我々の乗る折田汽船フェ リー乗り場は少し離れてあった。重い食料を引きずり ながら、やっと見つけた待合室、我々が一番乗りだっ た。トイレ、洗面、コンビニ朝食の買い出し、長椅子 で朝寝、各自様々の時間を過ごした。乗船1時間前、 「これから、乗船手続きとチケット販売始めます。」と アナウンスがあった。私、阿南のみチケットがないの で、列に並んで、片道の二等のチケットを購入する。 しばらくして乗船した。貸切かと思われたが結構多く の人達が乗り込んだ。



屋久島に向かう折田汽船

二等客室は、我々の部屋として1マス占領してしまった。荷物を下ろしこれから3時間半の船旅である。 久しぶりの船旅であるので最初は船内をちょろちょろしてまわったが飽きてきた。すると、B班のTさんが、今回食料で使う「だんご汁」の小麦粉を水でこね始めた。沢山のだんごができたと自慢げであった。南に向かうほど雲が厚くなってくる。宮之浦港の岸壁に着いたときは、前方の山々の峰は厚い雲の中だった。幸い雨は、落ちてないが、波浪のため船が30分ばかり遅れて着いた。ここからの交通手段はバスであるがバスは出発した後だった。今回は時間制限のある山旅である。 仕方がないので先を急ぐ手段としてタクシーを使うことにする。港には運良くA・B班を待つかのように2台のタクシーがいたのでそれぞれ分乗した。本土のタクシーと違いここのドライバーは観光案内もする「島

民3万、猿6万、鹿6万」海岸線を走りながらユーモ アタップリ。

走り始めて約5分後、B班はスーパーに立ち寄る。 しばらくすると我々もビールがないことに気づく、タクシードライバーに伝えると、安房の町でタクシーを 自分の行きつけの酒屋に着けてくれた。なんとか今夜のビールは確保できた。廻り道したがまた県道に戻り、 安房川に架かる橋を渡り、ヤクスギランドに向かう道路に入る。快調に走るが道は狭く、おまけにカーブの連続でスピードが上がらない。約1時間揺れに揺られ、我々が乗る予定であったバスを追い越し、淀川登山口に到着。(タクシー代9,500円/台)20~30台位停められる駐車場はレンタカーでいっぱいであった。



淀川登山口

ここから淀川小屋までは、登山マップによると、約40分。いささかザックが小さいせいか片手に食料を持ち歩行開始する。曇空で時より、小雨が降っている。上下の雨具を着るほどの雨ではない。大曲した所で1度小休止、小屋に近づくにしたがって雨は本降りとなった。急いで小屋に走った。小屋には、先客3名、あとから6名、我々を含め、今夜は総勢16名の人数になった。

着いて早々に4時より夕飯の支度を始める。今夜の メニューはB班は船内で準備しただんごを使い「大分 名物だんご汁」を作った。無事合宿初日を終えたこと を祝い、来るときに購入したビールで乾杯。

宴もたけなわになった頃、佐藤氏が1人でやって来た。夕飯に間に合ったのだ。全員そろったところで腹も満たしたことだし、明日の行動を考えて、6時45分消灯する。ほかのパーティも同時に消灯する。

夜中、トイレに目覚めた時は、水道の蛇口を最大限 開いた時のような感じで風・雨が激しく、小屋もろと もどこかに流れ出すのではないかと不安な感じになっ た。聞くには聞いていたが、これが、「屋久島の嵐の 現実」かと………

## <第3日目>

· 平成23年11月19日(土) 雨

4時05分起床、雨

携帯ラジオによると、屋久地方では、ありとあらゆる、「警報・注意報」が出ている。朝食の準備を開始する。メニューは、ご飯、味噌汁、たくあん、ふりかけ、たまご。

#### <食後ミーティング>

「行動調整が必要となる。天気との兼合いもあり、 もう1日延ばし行動できる人、予定の日程を実行する 人とに分かれ行動する。」ということに決定。滞留か、 強行か。一応強行ということで、いつでも出発できる よう準備した。5時40分出発で全員外へ出るが、また 一段と強く降る雨を感じ本日は小屋待機とする。



淀川小屋部屋の様子

部屋に戻ると、隣にいた学生も朝からトランプをしてくつろぎ始めた。滞留するのだろう。

小屋は、電気部屋は薄暗く、携帯電話は圏外、一日が長い。ともかく時間の経つのを待つには、食べることしかない。この日は、10時に昼食モチ入りラーメン。4時に夕食カレーライスを食した。7時には寝る。しばらくすると、単独縦走して来たと関西のガッツある女性が1人加わり、場所を譲る。又そののち、ツーアーガイド付きの8人パーティが、我々の寝た後入ってきた。小屋は、30名近く泊まることになる。とにかく、天気が回復することを祈るだけだった。

#### <第4日目>

· 平成23年11月20日(日) 雨/曇

3時30分起床、夜中に入って来た人で小屋は満室に なっていた、退屈すぎる程寝たので目覚めはよい。朝 食は、パンとコーヒーである。



出発前集合メンバー

小屋の前で全員の記念写真を撮り出発。5時出発である。小屋脇の淀川に架かる橋を渡り登りである。 ヘッドランプの明かりを頼りに登り始める。しばらくすると雪隠に行っていたS氏がチームに追いつく。

6時30分、辺りが明るくなって来たので、ヘッドランプを切る。しばらく行くと展望所ありの看板が迎えてくれた。この辺りから、登山道は下り始める。木道のステージの上を歩き、しばらくすると小花之江河に着く。

空は曇り、風強し、時おりガスがかかり小花之江河の庭園が見え隠れする。10分程進むと花之江河に着く。



花之江河

相変わらず強風で小雨、嵐の中で花之江河の看板をバックに記念撮影。帰りのメンバーは復路のコースタイムを気にしながら、行ける所まで足を延ばす事にする。7時10分、黒味岳分岐。黒味岳は主峰が縦走路のルートから少し外れているため、案外目指す人は少ない。ここの分岐に1日余裕組は荷物をデポし、全員で黒味岳(Mt.1831m)を目指す。ジグザグな急登が続き樹木が低くなり体でまともに風を受ける。雨も降ってきた約30分のアルバイトで黒味岳に着く。



強風の黒味岳山頂

山頂は一枚岩の大きな岩場、ガスで見え隠れする。腰を低く構えていないと体ごと持って行かれそうになる。黒味岳の頂きに立とうと何度も試みるが激しい風にはかなわなかった。頂上に5分も居ただろうか、諦めて下山を開始した。下界での情報によると黒味岳山頂付近では、携帯電話が通じるとか、試してみる。通じた。タクシー会社に「3名が淀川口に下山する」ことを告げ8時17分、黒味岳分岐点に戻る。ここで縦走続ける組4名と淀川小屋経由にて引き返す組み3名と二手に分かれる。全員で集合写真を撮り、我々は縦走組を見送り、分岐点を後にした。

縦走組の報告は、後半で佐藤氏にお願いする。



黒味岳分岐のメンバー

途中、花之江河で小休止、雨が小降りになり時より ガスも晴れたので、花之江河のビュースポットを狙っ て写真撮影、シャツターはプロ級のつもり、押しま くったが出来栄えはどれも今ひとつ。10時7分淀川小 屋着く。

荷物整理と昼食を取り淀川登山口に向かう。雨も すっかり上がり「森林浴」を楽しみながら下山した。 登山口にてタクシーと待ち合わせする予定であったが 早めに着いたので、私と長野さんは、加藤氏の好意で 「紀元杉」に寄ることにした。アスファルト舗装道路 を下って約50分、「紀元杉」のある場所に着いた。

「紀元杉」のある場所も世界遺産になった関係で人が増えて木々が傷むのを防ぐため、回りに歩廊を設置して、本物の根元は保護されて近づけないようにしてあった。1000年以上前から永く生存続けている大木は正に堂々とした風格を醸しだしていた。

12時50分迎えのタクシーがやってきた。

たった3日間だったのにタクシーの座席に座ると随 分永いこと文明から遠ざかったような気がした。

帰りのドライバーも行きと同じ人が来るものだと思っていたが仲間のタクシーで、最初はカタブツそうに見えたが、話しだすと面白いドライバー、山道から県道に出る。タクシーは快調に走る。しかし、途中、愛子岳登山口付近よりアクシデント発生、道路が年に一度あるかないかの交通渋滞である。理由は島上げてのマラソン大会が本日行われているところで、道路脇には沢山の観客・応援の人たちで一杯である。道路は走者と、先導車で、我々のタクシーもその後をノロノロと走る。行きの実績から約1時間10分であったので余裕のつもりであったが、帰りは1時間30分かかった。



屋久島を後にするメンバー

どうにか最終のロケット便に滑りこみセーフ。最後は、交通渋滞で少し緊張したが、有意義な初合宿であった。

今回は、タイムアウトでコースをショートカットし たがまた、近い内に全山縦走にリベンジしたい。

(阿南 寿範)

☆ここからの後半は佐藤秀二さんによる報告です。 <屋久島第四日目> 11月20日(日)

昨夜遅く小屋に到着したツアー客のガイドの携帯音 で目覚める。午前3時半。これと同調してツアー客ら がドタバタと音を立てながら準備を始めた。昨日一日 滞留してゆっくりとしていたものの、夜眠れないといけないと思い、昼は寝ていない。眠りはじめを襲われた上に朝も早くはなはだ迷惑なツアー客だ。東京から来て悪天候で飛行機が飛ばず、船で来て遅れたということだったが、もう少し考えて行動してもらいたい。山に登ったという実績だけでルールやマナーを無視してツアー成功?はないだろう。こんなツアーが事故を起こすのではないかとつくづく感じた。

愚痴はさておき、昨日夜の風雨も収まり外に出てみ ると満天の星空。天気予報は快方へ向かう予報。これ はラッキーと思いつつ準備を進める。昨日から食べた り飲んだりで、おなかはすいていないが、これから一 日の行動を考え、朝食を予定通りに食べた。屋久島は 現在、環境トイレを各所に設置し、排泄物のお持ち帰 📦 りを推奨している。もちろん携帯トイレを麓の観光案 内所等で購入しないといけない。お持ち帰りなので普 段なら軽量化できるところ、排泄しても荷物となる。 昨日より体の中で消化できないかと我慢していたがさ すがに限界となりやむなく携帯トイレの初体験をした。 トイレの中は便座の台が置いているだけで残骸もなく においも気にならず快適だ。淀川小屋横トイレは木造 であるがテント張りのところもある。排泄後おもむろ に物を包んでザックに入れる。宣伝どおりに臭いは外 に出ないけど持ち歩くことに違和感を覚える。この作 業のおかげで皆より出発が五分遅れた。皆は午前五時 に小屋を出発。まだ闇夜のなか、ライトを頼りに進む。 100円ショップで買った防滴のLEDライトが思いの外 W 役に立つ。やや暗いが歩くのに支障がない。今回はラ イト、マット、枕など100円ショップで売っている物 やランタン、炊事用の非常時用品をテストしたが、二 泊三日の屋久島程度なら、そこそこ役に立つことが確 認できた。約20分で先行組に追いついたが、あたりは まだ真っ暗。風や霧も出てきて天候は好転しない。

前回来たときにも同じ道を歩いているが、まったく記憶にない。「こんなところを歩いたかなぁ」と思いつつ進む。やがて空も明るくなり、今度は下り始める。標高差で50メートルほど下ったら小花之江河に着いた。霧の中で自然の庭園が望めない。木道の下を小川が流れている。登りで我々を追い抜いた3人組が「水の採取に来ました」と早々に下っていった。いったい何者?

我々はさらに十分で花之江河に到着(午前六時四十分)。歓迎しますとばかりに霧が晴れ見事な自然庭園が。写真を撮ろうとカメラを取り出していたら霧が出てきて自然庭園を撮れなくなったため、仕方なく霧の中で記念撮影。撮影後、黒味岳往復組と宮之浦岳越え組の二隊で行動することを最終確認し出発。途中、猿の声を聞きながら約二十五分で黒味岳分岐に到着。登山道横に荷物を置いて黒味岳へ。山頂への道は二カ所にロープがかけられた岩を越えて進む。霧のため山頂も確認できない中、約1時間かかって山頂に着いた。(午前八時十六分)山頂直下から強風となり山頂横では突風のため山頂の岩の上に立つことを断念。山頂直下で記念撮影し分岐に戻った。分岐で再度記念撮影し、ここで往復組とお別れ。

元の道に戻った頃には風も収まり、一路宮之浦岳を 目指す。しかし、天候は霧の中で視界はほとんどない。 時折切れる雲の合間から、歩いている周辺の景色が見 えるだけだ。前回来たときに泊った投石平(午前九時 十分) 付近では、屋久島らしい大きな岩と原生林の風 景が雲の合間から見ることが出来た。その後緩い登り となり、今度はゆるやかに下り始める。木道も出てき て世界遺産に指定されたときに登ったときと比べると かなり道が整備されていると思った。「こんな下りが あったかなぁ」と思いつつ、しばし下った後に登りが 始まる。宮之浦岳へ最後の登りだ。結構きつかったよ うな気がしたが、由布岳のジグザグの登りのような感 覚で歩が進む。油断するまいと一歩一歩確実に登る。 大きな石の間を抜けると鞍部のようなところに出る。 ここが、クリオ岳 (カタカナ表記) の分岐。大きな標 識が設置されていた。クリオ岳には登らずに宮之浦岳 へ最後の登り。久しぶりで気合いが入っていた。確実 に高度を稼いで、最高点らしきところが見え、最後の 急な坂を登ると頂上に着いた。(午前十時四十五分)

頂上は黒味岳の時と同じような強風。岩陰に隠れていないと体温を奪われる。頂上の堪能もそこそこに、記念写真を撮って下り始める。いきなり結構急な下りを下る。急な下りは長くはないが、強風にさらされる。このあたりから木道が現れ、急なところは階段になっている。急な階段は、強風で遠江さんが立ち往生。踏ん張るところも限られ前に進めない。「体重が重いこ

とが有利なこともあるなぁ」と勝手に思いつつ、階段もいらぬ世話だと感じた。遠江さんは風の合間で階段を下ることが出来、事なきを得た。下ること約20分で永田岳の分岐に着く。風は強く霧の中で永田岳は確認できない。永田岳に行っても状況は変わらないだろうと、永田岳に行くことを断念。このまま下ることとなった。

ここから先、木道が現れ始めて木道歩き。前回来た ときは雨の中このあたりで道に迷った。しかし、迷っ た場所は特定できず、現在は迷いようがないほどに木 道が整備されている。世界遺産になるとこんなにも変 わるものだと思った。晴れていれば天空の散歩道とで も言っていいような木道を歩く。やがて、平石展望台 に到着し、ここで昼食をとった。周辺は相変わらず霧 の中で展望はない。風はやや穏やかになってきたもの の気温も低く寒いので長居できない。早々に食事を済 ませて新高塚小屋に向かう。ここから先も木道が多く 現れ、急なところでは木の階段となる。その割合は約 五十パーセント程度。山を歩きに来たのか木道を歩き に来たのか考えたくなった。途中の第二展望台下では、 道に人工的に埋め込まれた、雨に濡れた木の切り株を 石と間違えて踏み、ツルッと滑って約五十センチ落下。 左足の膝を石に強打し、痛みが減るまでしばし休憩。 皆はさっさと行ってしまう。痛みが少し引いて、皆に 追いつくまで急いで歩く。追いつくと、前を歩いてい た塩月さんのザックの色が変わっている。あれっ?と 思いよくよく考えるとザックカバーがない。本人に確 認すると、本人の知らぬ間に強風に飛ばされたようだ。 被害は小さいので、そのまま先に進む。すると今度は、 遠江さんが木道に登山道周辺の小笹を何者かが切って 散らかされたままになっているところで足を滑らせ転 倒。途中にも刈った後があって気になっていたが、整 備したものであればきちんと片付けないのだろう!ど こかのガイドが勝手に刈りながら歩いたのではないか と少し怒りを覚えた。その後、今度は自分が前を歩く 塩月さんに近づきすぎて急ブレーキ。運悪く先ほど強 打した左足でブレーキをかけたので、踏ん張りが効か ず転倒。再び左膝を強打し歩けなくなった。こんなも んだなと、皆には先に行ってもらい、ため息。しばし の休憩の後急いで皆を追った。

坂がやや緩やかになり尾根が広がると新高塚小屋が 見えた。(午後一時五十分) 小屋の周りは広いテラス が設けられ立派に整備されている。まるで、リゾート 地にでも来たかのよう。今夜はここで泊まる予定だが、 小屋を覗いてみるとおおむね場所が埋まり、靴箱もす でに七割近く埋まっている。後からくる淀川小屋で一 緒だった九大ワンゲル部六名や、今日登ってくる人の こと、昨日、雨の中を宮之浦岳を越えてやってきた女 性が高塚小屋に泊っていたと言っていたので、高塚小 屋も整備されているのではと思い、時間もまだ早かっ たので、「高塚小屋に行きましょう」と進言。すんな りと受け入れられ、高塚小屋へ向かう。この判断が正 解だった。高塚小屋へ向かう途中、十名程度のグルー プとすれ違う。「新高塚小屋は多いですよ」と言うと 「えっー? そうなんですか?」と言いつつも予定は変 更できないようで新高塚小屋へと登っていった。新高 塚小屋から高塚小屋へは約50分。これまでの下り同様、 木道と登山道が混ざる道を下る。小屋が見えて長い階 段を下ると小屋のある鞍部に出た。(午後二時四十分 到着) 周辺は思ったとおり新高塚小屋ほどではないが 整備されている。ただ、小屋自体は昔のままだ。「ど うか空いていますように」と小屋に入ると中は単独登 山の二名のみ。上の段は空いていたので上の段に登る。 4名なら十分の広さ。換気口が空いたままで、前日の 雨で床が一部濡れていたが、穴をふさいで、床を片付 けて上段を占領。この後、二組四、五名が小屋を覗い たが、結局入ってこなかった。

小屋の近くには水場がなく、縄文杉に水場があると 聞き、下ること約五分。縄文杉下の水場で水をくんだ。 ここも整備されており立派な足場が組んである。「こ んなだったかな」と予定より早く見る縄文杉で記念写 真を撮り小屋へ戻る。十リットルポリタンクいっぱい に詰めた水は不安定で持ち帰るのが大変だった。この 夜は、先日の停滞で激減したアルコールを少量ずつ皆 で分け、明日の食糧が確保できるか確認し、カレーう どんを作って食べた。これがまたインスタントとは思 えないうまさ。山で食べると何でもうまくなるなぁと 感じつつ舌鼓。アルコールも尽きて、午後七時には床 につき就寝準備。昨日の食っちゃ寝の生活でなかなか 寝付かない。でも、昨夜と違い実に静かな夜だった。

## <第5日目>

五時前に目が覚めたが誰も起きない。ま、いいかと 寝袋に入ったまま居たが、五時半になっても誰も起き ようとしないので、しかたなくごそごそと起きると皆 起きてきだした。早々に朝食をとり、荷物を片付けて 出発準備。準備が出来たのが六時半。それからトイレ に行ったりでややだらだら。結局出発は七時前。予定 よりやや遅れてしまった。すでに九大ワンゲル部は、 小屋の前に到着している。新高塚小屋は賑わっただろ うなと思いつつ、昨日のペースなら何とかなると慌て ず下る。五分ほどで縄文杉。いきなり休憩・写真撮影。 昨夕と違っているかなとも思ったが、違うわけもなく 再び写真撮影して下る。ここから先の登山道は楠川分 かれまで全て木道化され登山と言うよりは木道歩きだ。 良くも悪くも世界遺産になるとこうなるんだと思った。 大王杉を順調に通過し、ウィルソン株で休憩する。 (午前八時二十五分)

ウィルソン株では、遠江さんの話によると、株の中 から空を見上げると株がハートの形に見えるところが あるらしく、撮影のため株の中に入る。確かにハート 型に見える場所があり記念撮影。この後登ってきた山 ガール姿の登山者が、「きゃー、ハートの形が見え る。」などと黄色い声を出して喜んでいる。そういえ ば、宮之浦岳から下っている途中にも鹿を見て、 「きゃー、見て見て!かわいい?」と山ガールが叫ん でいた。山ガールを研究している私には、「山ガール は黄色い声を出して喜ぶ。」のだと、山ガールの生態 を確認することが出来た。山ガールを含む数組の記念 撮影に協力した後に出発。前回来たときはこのあたり は急坂で雨の中、足を運ぶのが大変だったけど、すべ て木の階段が設置され歩きやすくなっている。前日ま での雨で階段が濡れているので滑ることに注意すれば 問題ない。ツアー客は屋久島の登山ガイドが案内して いるが、すれ違ったときに挨拶を交わし、「泊まりで 登っている方です。」と紹介するガイドもいれば、挨 拶も案内もせず、ぶすっとしているガイドもいた。ガ イドも登山者であることを忘れてほしくない。何組も のツアー客と離合しながら、ウイルソン株から約三十 分で大株歩道に出た。(午前九時)

ここには、世界遺産になった後、寄付を募って歩道

整備をしたという案内板がある。「そうなんだ」と初めて知った。確かに、線路の間にも木が敷き詰められ木道となっている。前回は不規則な枕木の上を歩いたが完全に遊歩道になっている。枕木自体も歩道整備の資材運搬に利用されたようで新しいものに交換されている。立派になったものだと感心した。でも、老朽化して交換するときは、また莫大な費用がいるのではと、入山料を取った方がいいのではないかといらぬ心配。ここから歩くこと約一時間ただひたすら木道を歩く。やや下りで歩きやすいが同じような風景が続きすぐに飽きる。カラフルな山ガール達と何組もすれ違うことが真新しい。約一時間歩いたところで一休み。軽く菓子などを口に入れすぐに出発。道は対岸に渡ったりしながら、さらに三十分ほどで楠川分かれに着いた。(午前十時四十分)

ここから再び普通の登山道に入る。どんな坂だったか記憶にない。さすがにこのあたりまでくると足に疲労がたまっている。途中、至近距離で鹿に出会うが、逃げるどころか接近しようとしてくるほどで、屋久島の鹿はなれなれしい。きつくもないが楽でもない坂をゆっくりと登り約五十分で辻峠に着いた。(午前十一時三十五分)

辻峠で昼食のラーメンを作る。燃料が残り少なく節 約しながら使った。おかげで昼食に時間がかかってし まった。辻峠で食事をとっていると、登山客が次々と 登ってくる。中には、登山服でなく普段着で登ってき ている人もいた。完全に観光地と化している。看板を 確認すると、辻峠までが白谷雲水峡からの一つのルー トとなっているのだ。「それでか・・」と納得しつつ、 さらに、残りの冷や飯をおじやにして食べる。これで また時間を取ってしまって、下り口にタクシーを呼ん でいるが、ぎりぎりの時間での出発となってしまった。 遠江さんは、下りに弱いからと先行して下る。残る男 三人もばたばたと片付けて下った。約二十分で白谷山 荘。このあたりに来ると観光客や登山客が入り交じっ て、離合するにも時間がかかる。山ガールの格好をし たおばさんと目が合って挨拶をしたら笑われてしまっ た。偽の山ガールだなと、山ガールには偽物がいるこ とを知っていたので、「それはないだろう。」と思いつ つ、さらに急いだ。やがて、遠江さんにも追いつき追

い抜いてやっとさつき吊橋に到着。タクシーと待ち合 わせの時間まであと二分。ここから約十分なので予定 時間にとうてい間に合わない。飯田さんが再三連絡す るも携帯が通じず、私が急いで下る。飛び跳ねるよう に下って白谷雲水峡入口の道路に着いたのは午後一時 五分。すぐにタクシーを捜すがいない。近くの駐車場 まで見に行くが見当たらない。仕方なく登山口に戻る と皆が下りて来た。(午後一時十分) 飯田さんが「連 絡がつかんのや」と言いながら、駐車場の方へ向かお うとすると、丁度、正面からタクシーの運転手らしき 人が携帯を見ながら歩いて来ている。確認すると、 我々が頼んだタクシーの運転手だった。携帯がつなが らずお互いにうろうろとしていた。後ろを振り返ると タクシーが止めていて、早々に乗り込み、港へ行く前 にアルコールの補給と、お土産を買うため運転手さん の紹介でスーパーに寄る。しかし、お目当ての焼酎 「三岳」はすでに売り切れて在庫がない。仕方なく代 わりの物を買ったりあきらめたりして、タクシーで港 へ。港の土産物売り場にはお目当ての「三岳」が、一 升瓶以外のものが置いてあり、スーパーで買わなくて もよかったねと。屋久島の合宿は終了した。

初めての合宿ということで、いろいろと小さなトラブルやミスもあったが、それなりに意味のある合宿だったと思う。高校山岳部の時は、毎日反省会を開いてチェックを行っていたが、今回は大人でもあるし各自でチェックして、次の山行に生かしていけばいいと思う。それよりも、環境トイレを要請している屋久島側の対応の割に下山した時にそれを捨てに行くと、小用、大用の大きなゴミ箱の中にそれぞれ1つずつしか



花之江河にて

入ってなかったり、相変わらず登山ガイドのレベルが 日程優先であったり、そもそも登山ガイドである前に あなたも登山者だよと言いたい場面があったりで問題 が多い。もっと登山者に対する周知徹底やガイドのレ ベルアップを図ってもらいたい。ちょっと愚痴ってし まいましたが、来年は祖母、傾あたりか、道なき道を 延々と歩くなんてのはいかがでしょうか?

(佐藤 秀二)

## 12月月例山行

保戸島 遠見山 (178.6 m)・南黒島 黒 島 (84.5 m) 牧野 信江

23年度のテーマは、「県内と九州の島の山に登る」です。沖無垢島も予定に入っていたのですが、船を出してもらうのに5万円ほどかかるとのことで沖無垢島は中止になりました。12月18日5時40分サニー出発。津久見港より7時20分の定期便に乗り25分で保戸島に着きました。一日5便ぐらいあります。料金は840円です。保戸島はまぐろ漁で有名な所のようです。周囲4km、人口約千人。山に向かってコンクリート造りの住宅がひしめき合い、同様に墓も密集して建てられています。お寺の右手から山道に入り、道は石やガラスの破片などもあり少し注意をして歩きました。8時40分に遠見山山頂に着きました。二等三角点です。頂上は広く、見通しはきかない。ここにもオレンジ色のプレートがつけてあります。

下山は途中で民家の方におりたので早かったです。 迷路のように家が建てこんでいます。海はきれいで港 のところに2匹の大きいエイが泳いでいるのが見えま した。

10時10分の船に乗って津久見港に着き、港のすぐ近



保戸島・遠見山にて

くの、「うみのみえーる つくみんち」という店の二階で11時からひゅうが丼を食べました。まぐろの切身に甘めの胡麻だれをからませ、ごはんの上に乗せたものです。その後海岸ぞいの道を北へ。トンネルを2つぐらい通り、伊崎バス停に広い駐車場があります。



南黒島にて

そこから南黒島はわずかな距離です。船は飯田さんの知人の知人と言う人が出してくれました。船に乗り移って5分ぐらいで着いたような気がします。南黒島は平坦な所はないようです。3分ぐらい歩くと海辺に小さいお堂が建ててあり、その右横に回って尾根に出るとやぶもなく快適な尾根歩きです。30分かかって12時40分山頂着。三等三角点。点名は黒島。ここでも皆写真におさまりました。見通しはありません。すぐ下山し、飯田さんが携帯電話で船を呼んでくれました。待っている間、空を見るとゆっくりとんびがわをかいています。天気はよく暖かい一日でした。

参加者:西、飯田、後藤、久保、今山、長野、宮本、 岐部、児玉、遠江、佐藤(秀)、佐藤(壮)、 池上(初参加)、牧野

## 2011年忘年登山1日目

〜釣鐘山から中摩殿畑山への縦走 宮本眞理子

今年の忘年登山は山国、耶馬溪の山々にて重廣氏との山行は1年ぶりである。いつものことながら前の晩から嬉しくて、目が冴え冴えとし眠れず。朝、お弁当を仕込み、山香を7時前に出発する。8時過ぎには道の駅「やまくに」に到着。中野車に先導され車を今夜の宿舎に移動させる。西さんは体調万全といかず宿舎周辺で過ごされるらしい。道の駅「やまくに」に一同

会し、加藤氏の挨拶、飯田氏より今日の山行の説明あ り。岩伏に佐藤車を先回りさせ、8時半全員が、数車 に分乗してまずは市平の釣鐘山登山口を目指す。少し 遅れて出発した車がひとつ谷を違え、親切な地元の古 老に車で誘導してもらい、合流するまで少し時間を費 やす。市平より装備を整え、9時半登山開始。すっか り葉を落とした里山の落ち葉を踏みしめながら林道を 進む。しばらくすると高低差のある植林地に入り、林 道市平両畑線の林道から50分後にようやく釣鐘山登山 口の古びた丸太の渡しに出会う。2年前の釣鐘山山行 ではなかなか見つけ出せなかった丸太の渡しだったの で見覚えがあった。植林地の尾根の急登を高低差で 100m程上がると勾配が緩やかになり、その先に852.1 m二等三角点のうっすらと雪の積もった釣鐘山山頂が あった。11時過ぎ記念撮影を済ませ、ちらつき始めた 雪に服装チェックをおこなう。釣鐘山より彦見岳の縦 走は北西になだらかな尾根を下ることになる。ここは 名前の通り、英彦山の展望が最高だが今日は望めそう にもない。先を急ぐため三角点には行かず、積雪の山 肌に腰掛け、ここでめいめいにお昼を摂る。じっとし ていると手が悴んでくる。雪の降り始めた中、中摩殿 畑山への縦走再開、北へ向かう尾根を緩やかに下って 行く。しばらくはやせた岩尾根が続くも、両側は急勾 配で落ちている。尾根の先端に出ると今度は一気に70 m程急降下している。ガレ場に落ち葉、雪が重なり足 場が危うい。恐怖感からつい腰を落として下りようと すると、重廣氏が見かねてロープで誘導してくれる。 が、こちらは冬山の経験も乏しくロープの扱への理解 もなく、重廣氏より厳しい指導を受ける。鞍部に下っ て少し上り返し、やっとの思いで崩壊地に出、無罪放 免。この雪中の行軍は長い、長い時間に思えた。後は 皆の背中を追うだけでブナの原生林も楽しむ余裕もな くなった。大野々林道から山頂へ続く尾根へ取り付く と 2 時半過ぎ、八大龍王を祭る鳥居が見えてきた。

991.1m三等三角点の中摩殿畑山山頂である。八大龍王に今回の山行の無事を祈願する。車組は足早に下山、私はいつまで続くのかと思われるコンクリート林道を痛み始めた左膝をなだめながら最後尾をついて歩く。夕映えの中、京岩がみえてきた。里の岩伏部落に入った所で石川氏が道端のたわわに実ったイシナシの



中摩殿畑山

木から少しばかりの恵みを頂き、おっそわけを私も頂 戴す。なんと鄙びた甘さで美味しいことか!急に元気 になる。 4時過ぎ中野車が迎えにきてくれ、回収され る。後は「やすらぎの郷山国」のとろりとした温泉に 入り、お楽しみの忘年会となる。総勢31名、それぞれ に自己紹介と山への熱き思いを語ってもらう。重廣氏 よりは「チャレンジ4000」に至った経緯について等の お話も伺う。今回の山行は私に貴重な体験をたびたび させてもらうことになった。2日目の樋桶山下山時に も岩尾根で左足が滑り、片側の急勾配にしがみついて いた細い木に左足が乗った格好で止まってくれ、何と か体勢を整え直すことができた。重廣氏より「あれは 運が良かったとしか言い用が無いですね。あんな事を 繰り返していたら命を取られますよ。」と。勢いとお 気楽のセットで山に登っていた私には重廣氏よりきつ いお灸をすえていただいた今回の忘年山行でした。

参加者:重廣、加藤、佐藤(秀)、園田、遠江、 安部、中島、塩月、石川、佐藤(壮)、 久保、後藤、飯田、中野、宮本

# 忘 年 会

山国町「やすらぎの郷」 2011年12月10日 久保 洋-



参加者:重廣、加藤(英)、西(孝)、甲斐(一郎)、星子、下川、石川、渡辺(昭)、宮本、渡辺(和)、加藤(衣)、牧野、西(梓)、池辺、小竹、安部(幸)、塩月、渡辺(千)、石神、飯田、阿南、佐藤(壮)、安部(可)、遠江、野村、中島、中野、園田、佐藤(秀)、久保

## 2011年忘年会登山2日目

樋桶山から大牟田山への縦走、檜原山 (2011年12月11日) 塩月 靖浩

重庸さんの貴重な講演を聞き、賑やかな忘年会を過 ごした「やすらぎの郷やまくに」を8時出発、途中の コンビニで各自昼食を手配し、下郷地区より檜山路に 入る。歌手、松原のぶえの生家がある中ノ坪を過ぎて (以前来た時は道端に東京ナンバーの黒のリムジン車 が停まっていたことを思いだす) 林道杠葉線をのぼる と右側に南登山口が有る。9時出発。雑木林を抜ける と足元が不安定なガレ場となる。昨日の冷え込みから の雪も残っており苦労する。2年前の雪の木山内岳の 忘年登山を思い出す。50分程で山頂に着く。旧耶馬溶 岩地の中心的位置を占めると云われるだけに山頂から の眺めはすばらしい。昨日縦走した釣鐘山、中摩殿畑 山も西に見え、北に犬ケ岳、経読岳、雁股山の県境稜 線も遠望でき、付近の岩峰郡もすばらしい。山頂で2 組に分かれる。1組は往路を下る。下りのガレ場が凍 結の心配があるので下りに自信のないもう1組は、東 登山口を目指して縦走路を取るが間もなく左右が切り たった岩稜のやせ尾根となる。細い尾根が連なりしか も岩場には雪もあり細心の注意でやっとのこと通過。 皆、曰く、「往路を下った方がよほど楽だったかもし れない。」11時45分大牟田山の山頂着 (827.4m)。 樋 桶山の三角点は此処に有る。(三等三角点、点名、樋





檜原山

桶山) 雑木林に囲まれ見晴らしは良くない。小休止の 後、東登山口を目指して下りにかかるがルートがはっ きりせず藪こぎの連続となるが飯田さん、中野さん、 佐藤さん達ベテラン会員のGPSに助けられやっとの 思いで林道に出てグリーンパークのキャンプ場跡地に 到着。往路を下り車を廻してくれた別動隊と合流し昼 食を取る。13時10分、檜原山に出発。大野、中畑、上 の川内集落経由で正平寺の駐車場に着く。正平寺はい かにも天台密教の修行場らしく静寂の中に有る。講堂 の裏手の道を上りは左、下りは右の案内に従う。途中 に押分岩、針の耳、左京の橋など行者の修行場後が続 き、30分程で檜原山頂(734.9m)に着く。上宮と白 山権現が鎮座されている。県境稜線の山々も遠望でき る。下りは左側の尾根を下る。蝙蝠岩、行者岩、護摩 焚岩、天満宮岩、金毘羅岩、大神宮岩など行者の修行 場が連なり講堂に下りてくる。講堂の前の神輿殿には 近在の川内、中畑、福士の三集落より三体の神輿が奉 納されている。いかにも神仏習合の地らしく七文字の 梵字が刻まれた鳥居をくぐり駐車場に着き解散式となる。

参加者:重廣、石川、佐藤(秀)、宮本、安部、 星子、園田、久保、渡辺(千)、池辺、 野村、中野、加藤、下川、中島、牧野、 渡辺(和)、飯田、塩月

# 3. トピック

34年のあゆみ No. 3

西 孝子

あと9日(1月25日時点)で80才になる私は、皆と 同じ速さで歩けない。くやしいやら、もどかしいやら。

樋桶山

ふと想いだしたのは、故野口支部長である。ネパール 行きをすすめてくれたのは彼で、「ヒマラヤぐらい見 ておかねば」とこの時70代で40代の私とは速度が違い 待つことばかり、ムクチナートより帰りがけジョムソ ンのロッジから外に出て姿の見えるのをじっと待った。 その時は何とも想いませんでしたが、この年になって なぜゆっくり一緒に進まなかったのか、くやまれてな りません。

わが家を訪れるときは必ず別府の銘菓をいただいた。この時いつも木本会員と一緒だった。「西さん、登山ほどいい趣味はないよ。」といった。「衣、食、住、植物、地球のきざみ、気象、生きるものすべてが観察できる。」と教えられた。ロッジで騒いでいたら、「9時すぎたら休むものだ。」と大声でどなられたこともある。松本高校山岳部の頃、今の北アルプス登山ルートはほとんど開拓された。私が昭和30年槍穂縦走した時は、鎖一つなく怖さを我慢して登った事を想いだす。松高山岳部で山歩きをしていた姿が思い出される。体格もよく、元気な歩幅で悪路の開拓に闊歩していた元支部長、最後は山行で加藤英彦会員に手をひっぱってもらい立ち上がる、そんな状態まで支部山行に参加していた。

ゆっくり歩くが、方向をかえてこんな文になった事 おゆるしください。元気で歩ける間は、私も山行に参 加することに努力したい。でも、登山口で近くにお宮 があれば、お参りする。田んぽで働いている人に話し かける。草花を写す。車の中で居眠りする。これもフ リータイムの面白さである。

## ペンリレー 第六回

# 由布登山口の「サクラソウ」と私

荒金 通子

暮れも押し迫った12月29日夜7時30分過ぎ、電話が鳴った。今日は、御用納めの翌日ということで私たち姉妹3人揃って、佐伯の叔母が入所している介護施設を訪ねて帰宅したところだった。調子の思わしくない叔母のことでチョクチョク入所施設より電話があっていたので、一瞬ドキッとした。受話器の向こうから聞

こえる声の調子は穏やかだった。

ご無沙汰している東九州支部からだった。ホッとしたのも束の間、話の内容は、ペンリレーの文書依頼で再びドキッとした。私には、ペンを執るような内容や話題がないが、順番とあれば仕方ない。引き受けることにしたが、いろいろ考えると眠れない一晩になってしまった。折角なので山に関することを綴ってみることにした。

山が綺麗だ、美しいな、また行ってみたいと強く 思ったのは、教職員を対象にした祖母山麓の神原での キャンプ講習会に参加した時だった。元気な若い男性 の先生方の中に女性はわずか3人だった。講習会の内 容に祖母山登山がありましたが、登山ということにつ いて深く考えていませんでした。登山の出発前準備で は、男女問わず、装備、食料等リュックの荷物は全て 同じ様に配分され、各々が荷物を詰めました。遠足気 分で出発した私ですが、男性の先生方に付いて登るの は、声も出せないくらいきつく、足元ばかりを見つめ、 皆について登るのが精一杯だった。途中小休憩を取り ながら、何とか国見峠に着きました。ここで大休憩を とることになり、荷物をおろし、頭をあげ、周りを眺 めた時、言葉では表現できない気持ちの良い感覚があ りました。その時から、あの言葉では表現できない気 持ち良い感覚を求めるようになり、遂に山行が止まら なくなってしまい、頭の中は勿論、見るもの、手にす るもの全てが山に関することばかりになりました。山 中毒になったのでしょうか。

では、私の山登り経験はそれ以前には無かったのか 考えてみると、記憶の中では小学校に入学したころに は、既に父に連れられて、私の住んでいる南立石、東 山、別府のアルプス鶴見山系、志高湖周辺の山などに は時々行っていた。登山というよりも小学校校区を散 歩するような感覚で出かけていたような気がする。父 の中では、前々から準備していたのかもしれないが、 私にしてみれば急に決め「今から行こう」というよう な感覚だった。道中は、登山者に出会うこともなく、 特に印象に残るような出来事もなかった気がする。

姉の話では、今では誰もが知っている由布登山口の「サクラソウ」。父は2歳の私と姉を連れて猪の瀬戸から由布登山口の「サクラソウ」を見せるために出

かけていたということでした。私たちが成長してからは、父は一人で「サクラソウ」を見に行っていたようです。私は、毎年「サクラソウ」の季節になると猪の瀬戸から由布登山口に行かずにはおれません。そんな私の山の原点は、父の大切にしていた由布登山口の「サクラソウ」かもしれませんね。

## 『歩く、登る、攀じる』

安東 桂三

人は、生まれてから、這い這いを経て、ヨチヨチ歩き、そして、普通の歩きを覚える。山に行かなければ、その『普通の歩き方』を一生、行う。

日本には、宗教登山とか、猟を目的とする登山は、 昔よりあった。が、近代登山は、欧米より入ってきた。 そのMountain climbingを登山と訳した。由布岳や久 住山も、冬の剣岳や穂高岳も、あるいは、谷川岳のク ライミングも、すべて、登山と言う言葉でひとまとめ にしてしまった。

普通の生活をしていて、たまに、由布岳に登るとなると、ほとんどの人が、『普通の歩き方』をしてしまう。大分の町中のトキハの前や、駅前を歩くのと同じように歩いてしまう。

でも、山の歩き方と『普通の歩き方』は、少し異なっている。結論から言えば、『普通の歩き方』は、 常に、2本の足の間に、体の重心があると言うこと。

体重50キロの人が、始めは、両足で立っていて、次に左足を上げて、左足が前方に着地した瞬間、それぞれの足には、25キロづつの加重がかかっている。と同時に右足は、地面を蹴って前方への推進力を得ようとする。そのまま、右足を前方へ移動する。その繰り返しで、歩く。これを『普通の歩き方』と言う。

一方、山の歩き方は、軸足に、体の重心が、必ずあ ると言う歩き方です。

体重50キロの人が、始めは、両足で立っていて、次に左足を上げて、そのまま前方の着地点へ、左足を持って行く。その時も、まだ右足に重心(全体重)が残っている。そして、着地する左足が、安全・確実だと判れば、左足に、重心(全体重)を移し、移動する。

(乗りこんでいく)

もし、左足を置いたところが、不安定な浮石だとす れば、左足を元の位置にバックすることが出来る。右 足に、重心(全体重)が残っているから。

文章で、歩きの様子を説明するのは、難しいが、これを読んだ皆さんは、その場で、足の動きをやってもらえれば、判ると思います。

かって、岩崎元朗さん(NHKの登山講座で、有名になった方)が、TVで言っていたことがあります。 山を歩く時は、『静加重、静移動』、『静移動、静加重』 といつも言われてました。この『静加重、静移動』を やってみると、必ず、軸足には、自分の重心(全体 重)があります。

この歩き方が、疲労を少なくし、また、転びにくい、 安全という方法です。

では、登る・攀じるについては、どうでしょうか。 よく『3点支持』とか『3点確保』と言われてます。 両手両足の4点の内、3点は、必ず、岩のホールド (手掛かり) や岩のスタンス (足がかり) を支持 (確保) しておく事を言います。3点が確実なものを支持 している間に、残りの1点で、次のホールドやスタン スを探し、支持出来たら、残りの3点の内の、1点が また次の同様な動作を行う。

登る・攀じるでは、足に、手も加わり、解析は難しいですが、登る・攀じる場合も、基本は足です。足は手に比べて、太く、筋肉量は、少なくとも4倍位あります。例えば、両手と右足で、体を支持し、残った左足で、次のスタンスに立ちこみ、重心(体重)を移していく。安定したクライミングになります。まるで、先ほど述べた山の歩き方と同じです。

日本山岳会東九州支部の会員会友の皆さま、歩く登 山しかしない方も、少しクライミングしてみませんか。 正しい山の歩き方を覚えるとハイキングがより安全に、 かつ疲労が少なくなると思います。

以上が、山の歩き方ですが、近頃は例外が現れました。フリークライミング、スポーツクライミングでは、 1点支持や、0点支持があるのです。両手両足の4点 の内、1点しか使わないものや、ジャンプして、支持 のないこともあります。基本は足ですが、あくまで、 これらは例外です。 短い文書で、歩き方のすべてを説明出来ませんが、 ただ、歩くだけでなく、自分の歩き方を、重心移動だ と考えて、足運びをやってみませんか。頭の中で、自 分が歩いているのを、外から見ながら。

この年末年始は、私は、2名の仲間と八ヶ岳山系の 広河原沢左俣へ登りに行ってました。ベースキャンプ を設営し、そこから、日帰りで約11時間、約700mの 登り下りでした。アイスクライミングでした。これも 基本は足ですが、アイゼンをつけた登山靴での登攀です。

日頃、アイゼンをつけていない我々は、冬用の登山 靴に加えて、金属で出来たアイゼンの装着と言う、足 に重りをつけての歩き(登攀)になります。アイゼン の前爪(前歯)は、自分の足先より、何センチも前に 出ています。やはり、トレーニングをして、その前爪 が、自分の体の一部に感じられるようになってからの 本番が、疲労の減少や、安全度の上昇や、確実に登れ ると言うことにつながりました。大分の山々でアイゼ ントレーニングをしました。写真を紹介します。

1 枚目が、高崎山での、アイゼンを装着しての練習。 2 枚目は、広河原沢左俣での様子です。



(1) 高崎山(2011.12.10~11)



(2) 広河原沢左俣 (2011.12.29)

# 4. インフォメーション

# 報告事項

## 本部関係

支部長会議 23年12月3日(土) 場所 品川プリンスホテル 年次晩餐会及び記念山行

23年12月3日(土)4日(日)

場所 品川プリンスホテル及び箱根駒ヶ岳・神山 支部関係

支部役員会 23年12月24日 忘年会及び忘年登山

> 23年12月10日 (土) 11日 (日) やすらぎの郷及び釣鐘山~

中摩殿畑山、樋桶山、檜原山

月例山行 11月18日(金)~21日(月) 屋久島·宮之浦岳 12月18日(日)

保戸島·遠見山、南黒島

# 新入会員・会友紹介

## 新加入会員

会員番号 14952 塩月 靖浩 会員番号 14953 渡辺 保恵 会員番号 14963 中島 洋祐

新入会友

会友番号 147 阿部 和則 (23.10.21) 会友番号 148 大園 広子 (23.10.21) 会友番号 149 佐藤 彰 (23.10.21) 会友番号 150 渡辺 昭 (23.10.21) 会友番号 151 池辺 明美 (23.10.21) 会友番号 152 阿部 幸子 (23.12.24)

# 月例山行予定

## 1月の月例山行の予定

月 日…1月29日(日)

目的の山…蔦島·羅洲 (66.4m)、

黒島·北黒島 (27.2m)、

津久見島·津久見島(166.2m)

集合場所…臼杵港

集合時刻…午前7時

### 2月の月例山行の予定

月 日…2月4日(土)~7日(火)

目的の山…奄美大島・湯湾岳(694.4m)、南郷山 (307.7m)、ヤクガチョボシ(440.6m)

日程については参加希望者で打ち合わせのう え決定します。

参加希望者は1月27日(金)までにお知らせ 下さい。

#### 3月の月例山行の予定

月 日…3月18日(日)

目的の山…大島・大島 (193.3m)、

船隠 (130.9m)、

高手島・高手島 (30.2m)、

横島・横島(138.4m)

集合場所…佐伯IC出口のローソン

集合時刻…午前7時

## 4月の月例山行の予定

月 日…4月15日(日)

目的の山…平戸島・志々伎山 (347m)

集合時刻…大分発午前5時予定

日程については参加希望者で打ち合わせのう決定します。

参加希望者は3月末までにお知らせ下さい。

※1月、3月の山行の参加希望者は、出発1週間前 までに事務局へお知らせ下さい。

※2月、4月の山行の参加希望者は、所定の期日までに事務局へお知らせ下さい。

# お知らせ

## ◆役員会のお知らせ

日時 2月18日 (土)

午後5時から

場所 由布院町並柳にて

役員の皆さんはあらかじめ予定して、是非出席して下さい。

※ 詳しい場所は別紙文書にて確認して下さい。

#### ◆編集部からのお願い

- ・原稿は原則としてメールでお送りください。 メールアドレスyariho1953@yahoo.co.jp
- ・原稿は記事内容にもよるでしょうが800字~1200 字を目処にお願いいたします。

400字詰め原稿用紙 2 枚~3 枚、パソコンです と26字詰31行~46行です。

#### 編集後記

今回の56号は、初めて印刷会社に依頼しました。その為、費用の関係で白黒になっています。手書き原稿は中野さんと手分けしパソコンで入力。メールで送られて来たものと一緒にし、5~6回に分けて印刷会社へメールに添付して送りました。今回、原稿が多すぎたので、費用面でページを押さえる必要があった為、個人山行などはこの号から外してあります。楽しみにしていた執筆者には、大変申し訳ないことになってしまいました。しかし、臨時増刊号として、時を移さず発行しようと思っていますので悪しからずご了承下さい。

2012年1月25日 発行

#### 東九州支部 支部報第56号

発行者 加藤 英彦

編集者 久保洋一・中野 稔

発行所 事務局 〒 874-0820

別府市原町 5-14 飯田勝之方 TEL・FAX 0977-21-3437